

さんに「静岡の山本さんのお陰で帰って来られた」と言っておられたといひます。私も戦地では伝令をしていて、自分の父親のような気がしていました。娘さんなどは、私を「恩人さん、恩人さん」と呼んでいました。少佐は帰還後、東京の海員組合かの理事さんをしていて、八十六歳で亡くなったのですが、戦後、戦友会で「岩田、岩田」と親しみを呼んでくれていましたし、家へ来ていただいて鮎釣りをして楽しんでくれました。亡くなった今でも親のような気がしていません。

## 遙かシベリアの空の下で

大阪府 久郷 直

中学を卒業後、三越に就職し、召集されるまで十七年ほど勤めていました。家庭は両親と男三人、女一人の四人兄弟でした。私は末っ子です。

二十歳の時に徴兵検査を受けましたが、丙種でした。

これで軍隊に勤めることはないと安心して三越に勤めていました。しかし、満州事変、支那事変、そしてとうとう亜細亜・太平洋戦争に突入してしまいました。それにつれ、五体満足なら年齢の区別なく根こそぎ動員されるか、軍需工場へ徴用です。

一方、日常生活の方も主食の米を始め衣料に至るまで切符制度になりました。三越でも売る物がなく、いっつ店が閉鎖になるか陰で話していました。

知人の薦めもあり、ここに勤務していたら召集もないだろうと産業報国会に勤めました。約一年もいたでしようか。

昭和十八年十月に召集令状がきました。その時は三十三歳で、家には妻と六歳と五歳の男の子がおり、大阪市内の江戸堀に住んでいました。両親はその時既に亡くなっておりました。第三連隊にでも入るかと思ったら、東本願寺に集合とのことでした。命令の日時までに行ったら二百人ほどの人が集まっていました。

そこで人名、人員の確認があつた後、冬服一式が支給されました。落ち着いた所でよく見ると三十歳から

四十歳ぐらゐの年輩の人で、もちろん、みんな世帯持ちで、冬服を支給されたので大方満州行きだろうと想像していました。

―即日召集、即日現地派遣ですか―

大阪―下関―釜山―琿春（満州国、間島省）と夜を日についで道中でした。制海権・制空権がアメリカに渡り始めた時でしたので、下関から釜山に輸送船が着くまで気が気ではありませんでした。無事釜山港についたときは心からほっとしました。

―琿春から本格的な軍隊教育が始まったのですね

琿春の第四〇一七部隊に入隊しました。独立守備大隊で歩兵を主体にした全兵力は約六百名です。

―関東軍下の初年兵教育はさぞかし厳しかったでしょうね―

私もそのように思っていました。ところが現役を主体にした関東軍の精銳部隊はほとんど南方に転出し、残っている兵は、予備、後備の兵だけです。

大阪から渡満した我々二百名の者は大阪、奈良、兵

庫の出身で年輩も三十歳以上ですから、内務班での打つ、殴る、蹴る、腹這う、などの私的制裁はほとんどありませんでした。班長や古兵も心得たもので、同病相哀れむというかピンタされた経験もなく、その意味において、内地の内務班のような陰惨さはありません。私の兵科は歩兵ですが、初年兵教育はみっちり絞られましたし、生命に関わる問題ですから、こちらも無我夢中でした。

名前は忘れましたが士官学校出の教官が、演習終了後、あの高い陣地を一番で占領したら特別外出を許可するなど無用の刺激を与え兵を疲労困憊させ、後で中隊長に「お前は兵隊を殺すのか」とこっぴどく怒られたそうです。

第一期の検閲も終わり、立派な帝国軍人になりました。その後は警備地区の巡察、演習、陣地強化等で時々たま豆満江を越え朝鮮まで遠征しました。約一年半ほど駐留していましたが、一回の討伐もなくゲリラの襲撃もありません。したがって実戦の経験なしということになります。

昭和十九年九月、上等兵に進級しました。

帰国していろいろの戦記やら、歴史の本を読みますとあの付近は金日成の根拠地だったのですね。よく討伐隊にも加わらず、またゲリラと遭遇もしなかったことと思います。

昭和二十年の夏になり、吉林省に集合の命令がありました。私の想像ですが、ソ連軍が全滿を制圧し、武装解除のため吉林市周辺の日本軍をそこに集めたものと思います。武装解除になるまでソ連兵と一戦も交えませんが、あちこちに武装解除された日本兵を見受けました。

—いよいよソ連行きですか—

貨車に乗る前日、糧秣廠から被服と一週間分の食糧が支給されました。帰国するまでの食糧かと喜びましたが、もしかしたらシベリア行きかもしれないとの疑念は払い切れませんでした。「貨車が南へ走ったら帰国、北へ進んだらシベリアだ」以外に考える外に道はありませんでした。

貨車は、北へ向かって走り始めました。満ソ国境を

通過すると、ソ連兵に貴重品は全部取られてしまいました。せっかく糧秣廠からもらった余分の被服なども。

—抑留地はどちらですか—

シベリアの中央にあるバヤンアウルという所です。私たちに幸いしたことは、第四〇一七部隊で一団が編制され、貨車も一緒、抑留地も同じということで非常に心強かったことです。はつきりした記憶はありませんが十日ぐらい掛かって、バヤンアウルに到着しました。

大きな兵舎に分散して入れられ、十班編制になりました。一班は平均四十人です。作業は工場へトロッコで資材を運ぶことで、疲労しきった身、空腹な体にはこたえました。風の便りに聞こえて来る炭坑、森林伐採、鉄道建設等の重労働に比較すれば楽なものかと思え休めました。

もちろん、ノルマはありましたが、あまり早く達成すると、翌日のノルマの目標が引き上がるので、加減しながら働きました。

食はパンとスープ、たまに野菜がつかまりました。何し

る絶対量が不足なのでたまりません。手に職のある者、縫工、大工、左官、衛生兵らは看守兵にこねをつけて、それぞれ出稼ぎに出掛け、その食糧を残った者で増配しました。

ある日、食事当番になった者が他人の分まで余分に食べ、腸を壊し数日伏せていましたが、亡くなってしまったという悲劇もあります。

他の収容所と異なり、逃亡し損なって射殺された者、過労から死に至った者、凍死した兵がいなかったのは不幸中の幸いでした。また、ひと所の収容所だけでも珍しいことです。抑留当初、よく大阪の夢や、出征時の子供たちの姿を夢見たのですが、疲労度が重なるに従い、寝るのが唯一の楽しみで、床に横たわるとバタンキューです。

単調な仕事と帰国の目途がたたないで、軽いノイローズになる兵も出始めました。洗脳されたインテリ崩れの兵がマルクス・レーニンの話を夜にすることもありませんが、聞く人はいません。夕食がすめばさっさと床に入って寝ます。その自称マルキスト兵は帰国の復

員船の中で袋叩きにあいました。

最初、新聞もラジオもない生活で日本は今ごろどうなっているのだろうか考えていた時もありました。そのうち浦島太郎になってしまいました。家内からの手紙も痺春で一回受け取ったきりで三年も音信不通です。

「子供たちはどうしているかな？」とも思いましたが、なるようにしかならないと諦めの状態でした。

昭和二十一年の冬も無事に過ぎ、昭和二十二年の春になると周りが少しざわめいてきました。「帰れるかもしれない」そんな予感が走りました。

四月、第十一回の船団に乗るとの通知がありました。「やっと帰国か、よかつたな」の思いと嘆息が先になり、帰国して何をするかも見当が付きません。何しろ二年も活字に触れてないのですから。ナホトカに三口滞任して復員船に乗りました。

―復員してどうされましたか―

舞鶴で熱烈な歓迎を受けて涙が出ました。大阪・神戸が焦土になったことを知り家内の実家の伊勢に向か

いました。伊勢市はほとんど爆撃されなかつたのですが、すっかり混乱して、人に道を聞きながら妻の実家に辿り着きました。二人の子供も私を覚えていてくれ二人を一緒に抱き締めました。

留守中、出征兵士の宅に最低の補助があり、何とかやってこられたと妻も言っていました。いつまでも遊んでいるわけにもいかず、と言って余剰物資皆無の折から三越へ再就職ともいかず、人の世話で渋沢倉庫に定年まで勤めました。

八十歳も過ぎると仲間が一人去り一人逝き、寂しいものですよ。老兵は去るのみですか。

## 私の軍隊記・シベリア行き

大阪府 出口 昌好

入営した時は両親も健在で姉三人、第一人の五人兄弟でした。

商業学校を卒業し、直ぐ大阪の丸紅に入社しました。

三年勤めたとき、現役兵として、独立山砲第三連隊に入隊しました。出生地が大分県でしたので所属したのは、久留米師団管下の独歩連隊です。

―入隊後の軍歴は―

昭和十八年一月の入隊で、昭和二十三年の七月の復員です。足掛け六年の軍歴で半分以上は抑留生活でした。

独立山砲に入隊後、数日を出でずして博多西公園に集結、博多港から釜山入港。朝鮮半島を北上し、奉天北部の開原に駐屯している独立山砲第三連隊第二大隊第五中隊に配属になりました。それが軍隊生活と抑留生活の始まりでした。

満州に駐屯していた時は警備が主で、ソ連が侵入するまで戦闘らしい戦闘はありませんでした。

―初年兵教育の一端をどうぞ―

何しろ馬の体に触れるのが初めてで、馬との生活がその後二年余り続きました。起床して点呼が終わると駆け足で厩舎へ行く。酷寒の寒風が吹き荒び、水の張るバケツの水での蹄洗、塗油は指の感覚をなくします。